

令和〇年（少）第〇〇号 殺人未遂保護事件

鑑 定 請 求 書

令和〇年〇月〇日

福岡家庭裁判所 御中

少 年 〇〇 〇 〇
付添人弁護士 福岡 九州男

頭書被告事件について、下記のとおり鑑定を請求する。

記

第1 請求の理由

1 事案の概要

本件は、少年が自宅において殺意をもって少年の父親を包丁で切りつけたという事案である。

本件では、父親からも、少年からも、特に本件に事件に至る、直前の、具体的な契機となるエピソードは語られていない。

少年は、これまで、父親はもちろん、誰かに暴力をふるったということとはなく、非行歴も一切ない。少年は、本件を除き、誰かを傷つけようと思ったことは一度もなかったと述べている。

このように、本件は、これまで全く暴力的な傾向を示したことがなかった少年が、突然、明確な契機となる出来事もなかったのに、父親に切りつけてしまったという特徴を有する事件である。

2 少年に表れていた精神的異常等

そこで、当職において少年から本件非行時や非行前の精神状態等について聴取したところ、少年からは以下のような説明を受けている（なお、捜査機関の供述調書等にも同様の記載がある。）。

(1) 本件非行以前

中学校のころから、自分自身としての実感がないような感覚、目に見えているものが映像・映画を見ているような感覚で、自分が自分ではないような感覚になることがあった。

そのような感覚になることは週1回くらいあり、友達の家でこっそり遊んでいて、家に帰る時間が近づいたときなど、父親が怒っているだろうと分かるときにそのような感覚になることがあった。

(2) 本件非行直近の時期

1ヶ月ほど前から、身体がだるく、集中力が切れるということがあった。仕事の疲れとは違い、気分がのらないという感じだった。

2～3週間前からは、大したことではないのに急にイライラしたりするということが増えた。気分には激しい波があった。

また、記憶がなくなるということが2回あり、2回目については、事件の1週間くらい前のことで、リビングにいたはずなのに、気付いたら自分の部屋におり、いつの間にか時間も30分くらい経っているということがあったが、その途中の記憶が全く抜け落ちていた。

(3) 本件犯行時

記憶はあるが、映画・映像を見ているような感じで、実感がなく、自分ではないという感覚があった。

切りつけた後、いったん逃げていくときも同じような感じで、手に血が付いているのを見て、急に冷静になり、元に戻ったような感じだった。

3 解離性障害の可能性

以上のような本件非行前や非行時の少年の状況等からすると少年は解離性障害に罹患している可能性が高い。

解離性障害については、精神疾患に関する専門書によれば、「精神的に健康な状態では、人はある基本的な性格を持った一個の人間としての統一された自己という感覚を持っている。解離性障害における重要な機能障害は、そのような意識の統一性を失うことである。」とされている。

解離は、心的外傷に対する防衛として現れ、多くの研究からは、心的外傷、特に幼児期の性的身体的虐待が、解離の症状や障害に関連すると示唆されており、少年が幼少期から父親からの身体的虐待を継続

して受けていたことは、まさにこれに該当する。また、少年から聴取したところによれば、少年は父親から身体的虐待を受けていた際、一切抵抗せず、ただじっと耐えていたとのことであり、そのような耐えがたい状況から自己を防衛するために、虐待を受けている「自分」とそれを認識している「自分」とを解離させるということが繰り返され、解離性障害に至ってしまっている可能性が高い。

D S M－V（精神障害の診断と統計マニュアル）では、解離性障害に分類される個々の障害として、解離性健忘・解離性同一性障害・離人症性障害・特定不能の解離性障害が挙げられている。

このうち解離性健忘とは、すでに蓄えられている情報の想起不能、すなわち記憶の喪失が生じるものであるが、少年が述べる記憶の喪失は、まさにこの解離性健忘の症状と一致する。

また、離人症性障害とは、現実感覚を一時的に失う程度にまで達した持続的または反復的な自己感覚の変容を特徴とし、自分が機械仕掛けであるかのように、夢の中にいるかのように、また、自己の身体から遊離しているかのように感じる症状・障害であるが、少年が述べる中学校のころからしばしば生じていた精神状態や、本件非行直前から非行直後までの精神状態は、まさにこの離人症性障害が生じていたと考えられる。

さらに、解離性障害による影響として、認知の歪みなどが指摘されているところ、少年の父親に対する記憶が極端に悪いものだけになってしまっていることや、今の状況から逃れるには父親を殺す以外に方法はなかったという認識を持ち続けているところなどは、解離性障害による認知の歪みが影響していると考えられる。

なお、少年は一見すると正常であり、普通に会話をしている限りは、特に精神疾患に罹患しているようには感じられない。

しかし、これは解離性障害一般にみられるところであり、統合失調症等と違って通常の会話や生活の中で、第三者から見て精神疾患を疑わせるような症状が出るわけではなく、解離性障害に罹患していても、その多くが病識がなく、精神科に通院していない割合が多い精神疾患である。

4 鑑定の必要性

仮に、少年が解離性障害に罹患しているとすれば、少年の要保護性

等を検討するにあたって、解離性障害が本件非行にどのように影響を与えているのかを検討することは不可欠であるし、処分を判断するにあたって、解離性障害の重篤度や治療の見通し、解離性障害の原因となっている心的外傷の対象である少年の父親との関係について医学的見地からどのように考えるべきなのかという点を検討することが必要である。

かかる事情からすれば、少年審判に先立って、少年を鑑定留置に付した上で、精神鑑定を実施する必要がある。

第2 鑑定事項

- 1 本件非行時における少年の精神疾患の有無及びその内容。
- 2 少年の精神疾患が本件行為に与えた影響の有無及び影響の仕方、機序。
- 2 現在の少年の精神疾患の有無、その内容及び今後の治療による改善可能性。

第3 鑑定人の選定

鑑定人の選任は裁判所に一任する。

以 上